

短大特任教員教育研究業績書

平成30年 5月 7日

氏名	ふりがな	所属	職位	性別
加藤 松次	かとう しょうじ	保育学科 通信教育課程	教授・准教授・ 講師 ・助教	Ⓐ・女

担当科目名

言葉指導法、基礎学力演習Ⅰ

学歴

和暦(西暦)年 月	事項	学位
昭和53(1978)年 4月	帝京大学文学部国文学科 入学	
昭和57(1982)年 3月	帝京大学文学部国文学科 卒業	学士(文学)
昭和57(1982)年 4月	帝京大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程 入学	
昭和60(1985)年 3月	帝京大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程 修了	修士(文学)

教育歴・職歴

名称	期間	教育内容又は業務内容
帝京大学高等学校	昭和57年4月～昭和58年3月	非常勤講師
栃木県立那須工業高等学校	昭和58年4月～昭和60年3月	教諭
栃木県立田沼高等学校	昭和60年4月～昭和63年3月	教諭
栃木県教育研修センター	昭和60年4月～平成6年3月	教育相談員
栃木県立足利南高等学校	平成6年4月～平成14年3月	教諭
栃木県立宇都宮商業高等学校	平成14年4月～平成17年3月	教諭(定時制課程)
栃木県立足利工業高等学校	平成17年4月～平成20年3月	教諭(定時制課程)
栃木県立学悠館高等学校	平成20年4月～平成23年3月	教諭(フレックス・通信制課程)
栃木県立鹿沼商工高等学校	平成23年4月～平成29年3月	教諭(定時制課程)
栃木県立宇都宮工業高等学校	平成29年4月～平成30年3月	教諭(定時制課程)
小田原短期大学	平成30年4月～現在に至る	講師(保育学科通信教育課程)

所属学会等

名称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)
栃木県高等学校教育研究会	昭和58年4月～平成30年3月	地区委員・幹事
日本教育心理学会	平成14年7月～現在に至る	会員
宇都宮大学国語教育学会	平成15年9月～現在に至る	会員
日本学校心理士会	平成25年1月～現在に至る	会員
全国大学国語国文学会	平成30年4月～現在に至る	会員

社会活動等

名称	活動期間	活動内容
家庭教育オピニオンリーダー研修	平成6年4月～平成30年3月	栃木県教育研修センターが栃木県総合教育センターになってから、男女共同参画事業の一環として始まった研修の講師を務めた。家庭教育オピニオンリーダー研修は、家庭や近隣地域等の教育力の向上を図るために、地域ぐるみで子育てに関する自主的・主体的な学習活動や相談活動を支援・援助するのに必要な知識・技術の習得をめざして現在も行われている。この研修には保育士や幼稚園教諭も参加している。特に公立保育園の保育士や公立幼稚園の教諭は、地域社会の教育(子育て)の担い手として期待されている。人間の証ともいえる「言葉」の意義について理解した上で、幼児の言葉を育て、言葉に対する感覚を豊かにする知識・技術も身に付けてもらっている。実際には、言葉指導法の授業の概要や全体目標である幼児の言葉に関

		する現状や課題を踏まえた上で、幼稚園教育要領に示された領域「言葉」のねらい及び内容について、背景となる専門領域と関連させて理解を深めてもらったり、その上で幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて、具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法も身に付けてもらったりしている。そのために、講義だけでなく、演習も行っている。
教職初任者研修	平成6年4月～平成30年3月	栃木県総合教育センターで行われている栃木県公立学校教員の基本研修の講師を務めた。栃木県教育研修センターで教育相談員として、小学生や中学生、高校生や大学生などの相談だけでなく、保育園児や幼稚園児の相談にも対応した経験を生かして、コミュニケーションにおける言葉の重要性についても指導・助言した。
中堅教諭等資質向上研修	平成6年4月～平成30年3月	栃木県総合教育センターで行われている栃木県公立学校教員の基本研修の講師を務めた。栃木県教育研修センターで教育相談員として、小学生や中学生、高校生や大学生などの相談だけでなく、保育園児や幼稚園児の相談にも対応した経験を生かして、コミュニケーションにおける言葉の重要性についても指導・助言した。

担当教科目に関する資格・免許等

名称	取得年月	取得機関
中学校教諭一種免許状(国語)	昭和57年3月	東京都教育委員会 昭57中一第7806号
高等学校教諭一種免許状(国語)	昭和57年3月	東京都教育委員会 昭57高一第8297号
高等学校教諭専修免許状(国語)	昭和60年3月	東京都教育委員会 昭60高専第662号
高等学校助教諭臨時免許状(書道)	平成17年4月	栃木県教育委員会 平17高臨第279号
学校心理士	平成25年1月	学校心理士認定運営機構 第164372号

研究実績に関する事項

代表的な著書、論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
(学術論文) 1. 『源氏物語』の教育心理学的考察—惟光の場合—	単	平成21年3月	『国語—教育と研究』第48号(栃木県高等学校教育研究会国語部会)	従者論。『源氏物語』は登場人物の心理描写がきめ細やかである。それは、フロイトの精神分析を使って、作中人物論を展開した研究家がいほどである。本稿では、光源氏と惟光の関係を細かく考察しながら、近年注目されているソーシャル・サポートについても論究した。本稿で取り上げている「紅葉賀」～「花散里」巻における惟光は、光源氏にとつてのソーシャル・サポートであり、その役割が際立っている。コミュニケーションにおける言葉の重要性についても取り上げた。pp. 1～7。
2. 『雨月物語』と『源氏物語』	単	平成22年3月	『国語—教育と研究』第49号(栃木県高等学校教育研究会国語部会)	作品比較論。主人公が靡靡不可思議な世界へと誘われて、儂げで妖艶な女性と邂逅する物語の本格的な文芸作品としての出発点は『源氏物語』であり、その流れを汲む作品として、川端康成の『雪国』などや泉鏡花の『高野聖』があるとこれまで詳述してきたが、本稿では上田秋成の『雨月物語』もこれらの文学に連なる作品であると論究した。魔界の文学と呼ぶにはしみじみとしているので、異界への文学の系譜として位置づけた。pp. 7～13。
3. 『源氏物語』の教育心理学的考察—黒鬚のものと北の方の場合—	単	平成23年3月	『国語—教育と研究』第50号(栃木県高等学校教育研究会国語部会)	作中人物論。『源氏物語』は登場人物の心理描写がきめ細やかである。それは、フロイトの精神分析を使って、作中人物論を展開した研究家がいほどである。本稿では、夫の無理解な言動から心の病になってしまった黒鬚のものと北の方について細かく考察しながら、社会問題にもなっているひきこもりについても論究した。彼女が被った家族トラウマは深刻である。『源氏物語』において加害者の、あるいは結果として加害者に同調してしまった者の心の傷も問題にしている。対

4. 『源氏物語』の教育心理学的考察—惟光の場合—	単	平成24年3月	『国語—教育と研究』第51号(栃木県高等学校教育研究会国語部会)	<p>象を3歳児から成人を想定して執筆した。コミュニケーションにおける言葉の問題についても論じた。また、言葉指導法の内容でもある幼児の言葉を育む環境構成や援助について意識しながら執筆した。pp. 4～13。</p> <p>従者論。『源氏物語』は登場人物の心理描写がきめ細やかである。それは、フロイトの精神分析を使って、作中人物論を展開した研究家がいほどである。本稿では、「須磨」巻以後から光源氏と惟光の関係を細かく考察した。惟光の従者としてのライフスタイルは、過度のストレスに心を蝕まれている現代人に、生きるヒントも与えてくれる。惟光の人生は人間関係から被ったストレスは人間関係で癒されることも物語っている。コミュニケーションにおける言葉の重要性についても取り上げた。pp. 13～24。</p>
5. 『源氏物語』の教育心理学的考察—柏木の場合—	単	平成25年3月	『国語—教育と研究』第52号(栃木県高等学校教育研究会国語部会)	<p>作中人物論。『源氏物語』は登場人物の心理描写がきめ細やかである。それは、フロイトの精神分析を使って、作中人物論を展開した研究家がいほどである。本稿では、女三の宮への密通によって落命した柏木の悲劇を心理学的に考察しながら、親友である夕霧の立場も再考して、このような悲劇を起こさないためには、コーディネーターの存在とチームによる心理的援助サービスが必要であると論じた。コミュニケーションにおける言葉の問題についても論じた。pp. 10～18。</p>
6. 『源氏物語』の発達心理学的考察—近江の君の場合—	単	平成26年3月	『国語—教育と研究』第53号(栃木県高等学校教育研究会国語部会)	<p>作中人物論。教育現場において、注意欠陥・多動性障害(ADHD)やアスペルガー症候群(AS)などの軽度の発達障害は、子ども(園児・児童・生徒)だけの問題ではなく、大人(保護者・同僚教師)の問題でもある。本稿では、おそらく日本文学に初めて描かれた注意欠陥・多動性障害(ADHD)の事例ではないかと考えられる近江の君の生きづらさを心理学的に考察しながら、その支援や援助について論じた。対象を3歳児から成人を想定して執筆した。また、言葉指導法の内容でもある子どもの言葉の発達過程を念頭に置いて論じた。pp. 1～11。</p>
7. 『今昔物語集』と『源氏物語』	単	平成27年3月	『国語—教育と研究』第54号(栃木県高等学校教育研究会国語部会)	<p>作品比較論。主人公が摩訶不思議な世界へと誘われて、儚げで妖艶な女性と邂逅する物語の本格的な文芸作品としての出発点は『源氏物語』であり、その流れを汲む作品として、川端康成の『雪国』などや泉鏡花の『高野聖』、上田秋成の『雨月物語』あるとこれまで詳述してきたが、本稿では『今昔物語集』もこれらの文学に連なる作品であると論じた。その感覚的な表現に着目して、『今昔物語集』の「人に知られぬ女盗人の話」と『源氏物語』の「夕顔」巻を比較考察した。pp. 34～40。</p>
8. 『源氏物語』の発達心理学的考察—頭中将の場合—	単	平成28年3月	『国語—教育と研究』第55号(栃木県高等学校教育研究会国語部会)	<p>作中人物論。親にも発達障害が見られる場合は、その特性をよく理解して、まず親に適切なサポート(支援・援助)を行わないと、その感情の不安定さから生じる苛立ちが、子どもへの虐待などにつながってしまうこともある。近江の君も思い通りにならないならば、宮中の笑いにしづまえという扱いを父親である内大臣から受けている。いくら外腹の娘とはいえ、これはひどい仕打ちである。どのように親をサポートしていけばよいか、頭中将の人物造型を再考しながら論じた。対象を3歳児から成人を想定して執筆した。また、言葉指導法の内容でもある子どもの言葉の発達過程を念頭に置いて論じた。pp. 1～9。</p>
9. 『源氏物語』従者論—惟光の場合、「若紫」巻から—	単	平成30年3月	『国語—教育と研究』第57号(栃木県高等学校教育研究会国語部会)	<p>従者論。『源氏物語』における女房の役割についてはよく論じられているが、従者の役割についてはあまり論じられていない。秘密を共有し合うほど光源氏のそば近くに仕え、実名でも登場している惟光や良清の役割は、とても重要で看過できないものがある。それを改めて詳察し、この物語における従者の役割について考究した。本稿では光源氏</p>

				<p>の有能な従者である惟光の「若紫」巻における役割について論じた。pp. 32～39。本稿は『宇大国語論究』第16号（宇都宮大学国語教育学会、平成17年4月）に掲載された『源氏物語』従者論—惟光の場合、「夕顔」巻から—の続編である。</p>
(その他)				
その他（表彰等）				